物には、水に溶けるものと溶けないものがあることに気付かせる。

例4　あめでジュースをつくろう。（甘露あめ）

※　あめが溶けることを、水とあめの両面から調べさせ、溶けるという概念をここで再確認する。

※　飲むという欲望や飲み物作りだけに気をとられず、せっけんや氷ざとうの溶け方と比べながらじっくりと見させたい。

例5　身近にある物を水に溶かしてみよう。

※　これまでの学習から得た見方、考え方、扱い方などを基に、身の回りのさまざまなものを調べようとする意欲を持たせ、物への興味・関心を高めたい。

o　溶かしてみたい物として

- 溶ける物

  キャラメル、食塩、砂糖、ジュースの粉、ドロップ

- 溶けない物

  砂（海砂であれば一番いいが、砂場の砂を使うときは、よく洗ってからやるとよい）

  油、バター、チーズ

- 溶けるか、溶けないかよくわからない物

  チョーク、土、小麦粉

※　土やチョークの粉を入れると水全体がにごる（色づく）ことから溶けたと考える子どももいる。このような場合、時間をかけて観察させ、土やチョークの粉が沈澱し、水と分かれる事実に着目させて、石けんの場合と違うことに気付かせる。

o　調べる観点として

- 色の違い
- においの違い
- 手触りの違い
- 味のちがい

物が水に溶けて見えなくなってもなくなったのではなく、物が溶けた水は色、におい、手触りなどで見分けられ、もとの水とは違っていることに気付かせる。

例6　ビンに入っている水は、何かあてっこをしよう。

※　五感を使っていろいろ調べさせる。

※　一年生の時のくだものの汁を使ったあぶり出しを想起させ、蒸発乾固の方法も、食塩水や砂糖水のように無色透明な場合、使えることを簡単に扱ってもよい。